県民俗情報コーナー図書

奈良県立　　（通巻第15号）

民俗博物館だより

Vol. V No. 1
1978. 5. 5

山　の　神（東吉野村小栗栖）

目　　次

作図について …… 1
ノガミの蛇と絵馬（収蔵資料の紹介） …… 5
旧萩原家住宅紹介 …… 7
おしらせ・その他 …… 7

作図について

日本デザイン学会々員
植田啓司

人間の話す言葉の意味は深遠なものがあり一つの単語が場合によって様々な意味を持ちます。図と言われるものについても同様の事が言えるでしょう。

一応、グラフや、組織図、社会の組織を示す図などを除外して考え、物の形態等を示す図に限ってみても、図面と呼ばれる建築用の図、機械用の図や電気の配線図、水道等の配管図、そして組立説明図や構造説明図、さらに絵といわれるものに近い、透視図法を用いた図、最後に、略されたと思われる部分のあるイメージスケッチやラフスケッチと呼ばれるものまで様々です。

これら物にかかわる図に共通するのは、図がイメージと実際の物との橋わたしの役をしてきたということです。そのため、平面図や立面図、時には各部品のそれも各々の面から見た六面図といったものすらありました。

特に忘れてはならないのは、図には、図の作者と、図の読みとり手とがあることです。分析したり、調査、研究の場合、この作者と読み取り手が同一人の事があるので、自分だけにわかる図で事足れりとしてしまいがちではないでしょうか。

すなわち、良い図とは、あるいは、わかりやすい図とは、作者の意図する所を、正確に、すみやかに読みとり手に伝えるべきものでしょう。この、図の作者の意図する所は様々で、その作者の目的によって様々な図ができます。その最もひどい場合は、とにかく図があればよいのだ、といわれる不思議なものすらあります。いくら何でもこれは除外して考えて、管理用と、理解のためと、作るためというように分けて考えてみましょう。この管理用というのは、照合、確認のためのもので、大まかな寸法、たて、横、高さのような、マッスの大きさと写真があれば良いのではないでしょうか。

ところで今、世間にあふれている図は、やはり、作るための図でしょう。この場合、説明を見て、一つのことがらを作りだすためといったものを含めるとほとんどがこのための図になってしまいます。この図は、新しく作るための設計図と、それに伴なう説明図といったもの、又、再現するための図もこれになるでしょう。この場合の特色は図が先で物は図に従って出現してくるのが通例です。

ところがあと一つ、理解のための場合は、おおむね、物が先にあって、その調査、研究、解釈のための図が主眼となるのではないでしょうか。そうして、この場合、物が現に存在しているため、その実際の物におんぶしてしまい勝ちになります。それに対して作るための場合、図に語らせるしかない。つまり、図が語ってくれない事がらがあってはならないのです。合目的な問いかけのすべてに答える必要があるのです。

なぜなら、図から一つの物が確定されて出てこなければならないからです。実際には、現場で裁量される場合がままあるようですけれど、この点から見れば、物が先にある場合はより厳しいとも言えるのではないでしょうか。良い図で、完全な図は、その図だけをもとに、まったく同じものが作り出される必要にしてかつ十分な図である。これが、調査、研究の場合の理想的な図になってくるのではありませんか。

しかし、調査、研究の目的に応じて、すべて完全な図でなければならないとは言えないでしょう。たとえば福岡市馬出（まいだし）の曲物から起こしたこの図は、形態はこれで一応書いてありますが、この現物に描かれた図を全く無視してあります。描かれた図柄の場合は、模写ともからんで、簡単に説明のつくものでないので、今の場合無視しました。

さて、理想的な図の場合、写真のように簡単な不精箱ですら図の如く、正面、背面、断面から面取りを示す拡大図まで、多くの図が出てきます。念を入れる場合、バラバラの木片を考え、その三面図と組立て説明図まで付けるのが万全かも知れません。

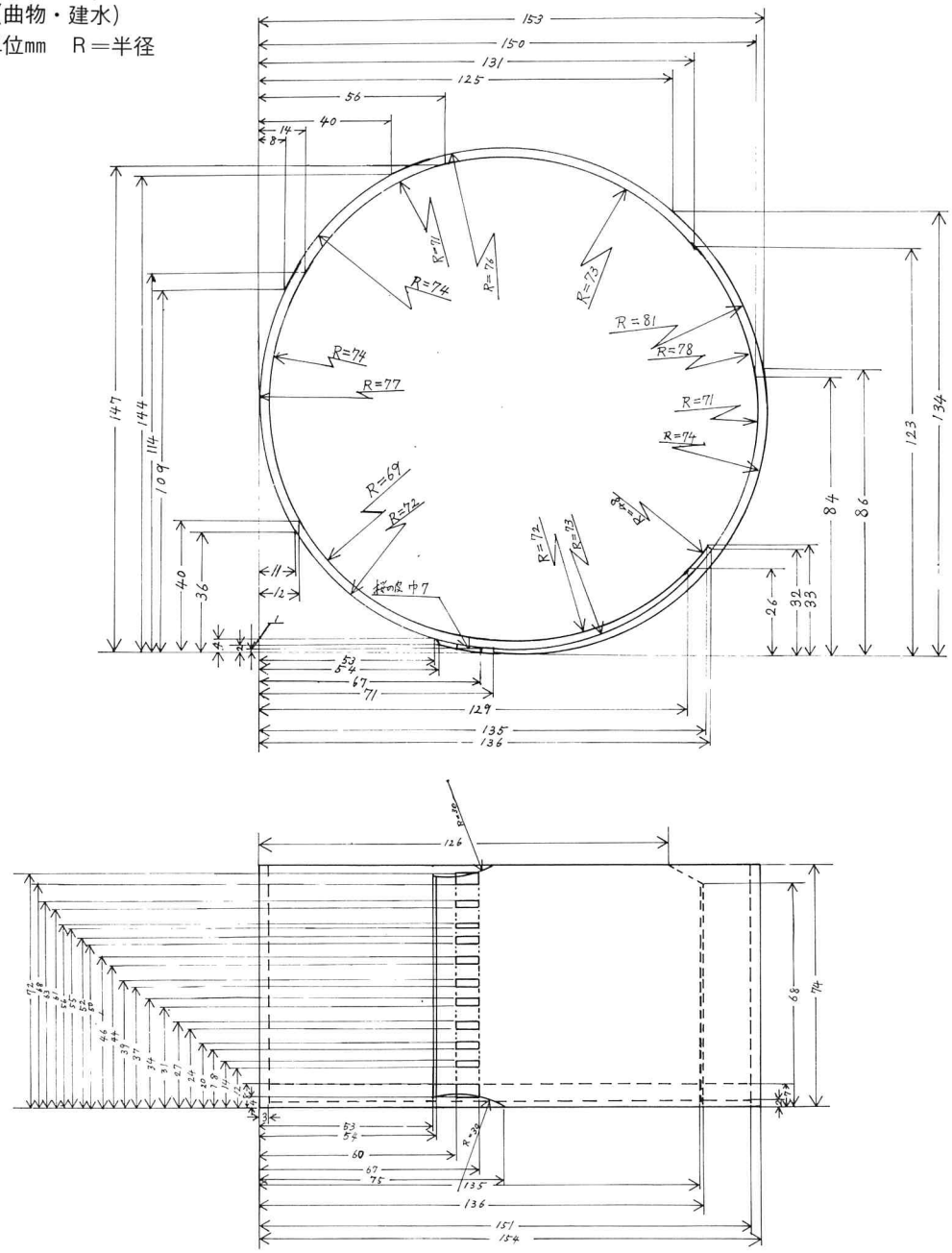
でも、自然なカーブは図の表示がたいへんすぎるといわれるでしょう。しかし、ここで、カーブの寸法をとるのは理由があります。そ

れは、図の複製の段階での精度が落ちないことなどです。図と同じカーブだというのはたやすいのですが、写しを作成する度に少しづつ異なるものになっていきます。

ところが、図の如く、寸法、曲率(アール)を入れておくと、この図のゆがんだ写真からでも正しい図ができます。そして、図から測定しなくとも曲線が読みとれるのです。

こうしておけば、図としての利点は大きくなります。図としての、たとえ現物がなくとも現物があるのと同様のことが、どこででも、同時に多くの所ででも可能となります。図は扱いやすいので、検索や、比較、検討が容易になります。そのためには図が数多くあれば

博多馬出の桧物
(曲物・建水)
単位mm　R＝半径

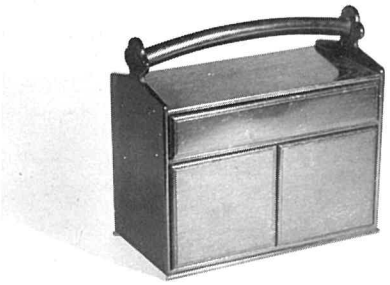


情報コーナー図書

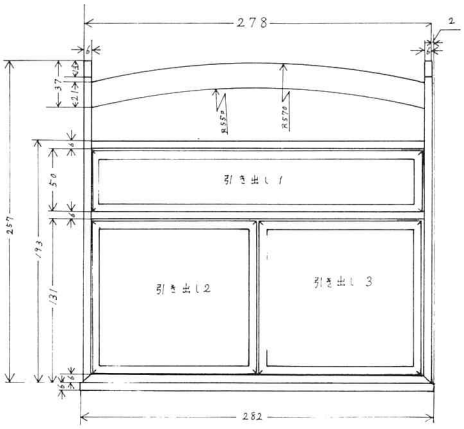
あるほど良いことになります。

だからこそ、図を書きましょう。こんな図は大そうでとても書けないなどとは言わず、わかるだけの事を、書けるだけのことを図に書いてみましょう。

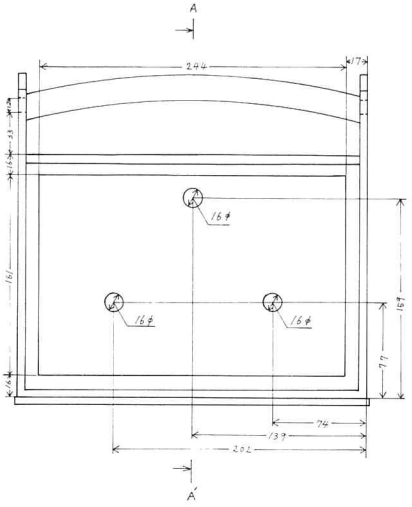
図に書こうとすると物をよく見るようになります。そのためにも図を書くことは大いに役に立ち、図は、書きたい者や、専門家にまかせれば良いとはけっして言えないのです。物を調べて、理解したいのであれば、先ず、図を書きましょう。



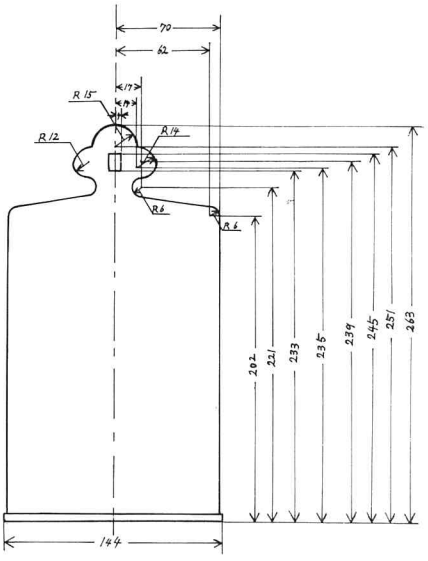
不 精 箱（植田家所蔵）



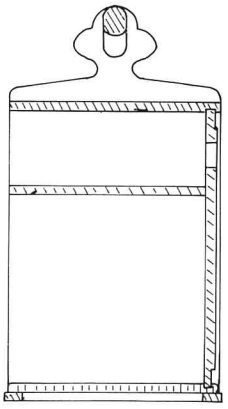
不 精 箱 正 面 図



不 精 箱 背 面 図

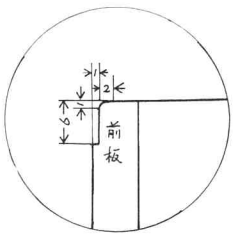


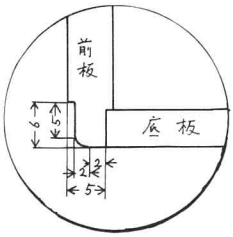
断 面 AA′

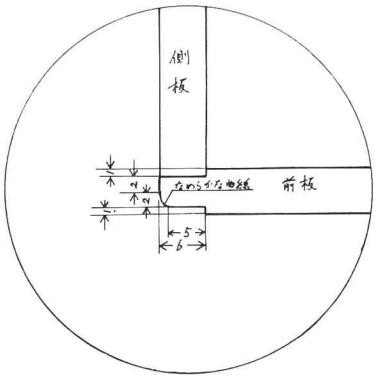


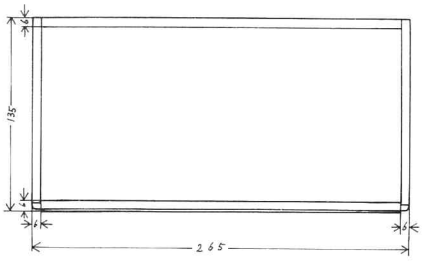
不 精 箱 側 面 図

引き出し前板の面取りと側板との関係

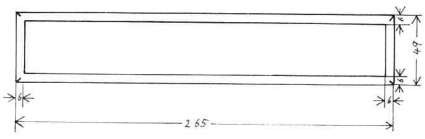


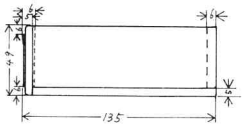






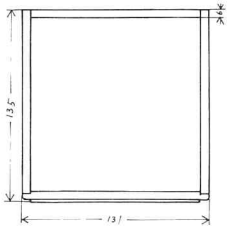
引き出し（1）
三　面　図



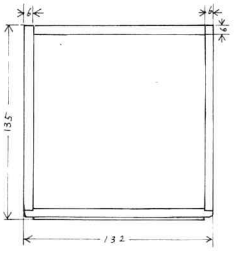


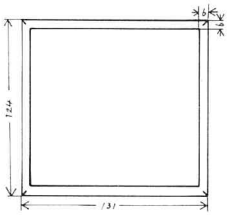
◀引き出し（2）　引き出し（3）▶

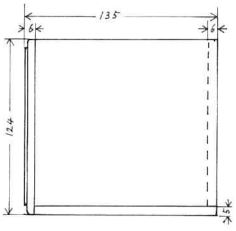
平面図
正面図　側面図

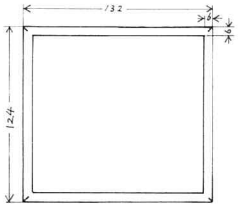


平面図
正面図









情報コーナー図書

収蔵資料の紹介 (13)

ノガミの蛇と絵馬

松崎憲三

大和におけるノガミ祭のあらましについては先に触れたが（本誌Vol. Ⅳ No.2)、ここではノガミの祭に用いられる祭具のうち、当館に収蔵されている絵馬３点とノガミの蛇について紹介することにしよう。

絵馬３点のうち１点は田原本町今里で採集されたものであり、桧製、牛馬が向い合うような恰好で画かれている。これは村の巧者によって作製されたもので、新暦６月５日のノガミ祭に洗米、御神酒、スルメ、ショウブ等と伴に供えられる。一方残りの２点は橿原市地黄のもので、牛耕、馬耕の様子がそれぞれ杉板に画かれ、「例年通り大豊作」と記されている。ここでもやはり毎年村人が２枚画き５月５日の祭の際供えるのが習わしである。

ノガミに絵馬を供える風習は、奈良盆地の南北を問わず広く認められる。たとえば奈良市法蓮佐保田町では、頭屋が６月１日の行事当日牛と馬を画いた２枚の絵馬を供えるそうであり、また同市芝辻では６月１日にノガミに詣った牛は絵馬とチマキをもらい、この絵馬は牛小屋の入口に吊っておくという。[註(1)]また田原本町矢部[註(2)]、奈良市三条地区では版木があってそれを紙に刷って供える。後者の場合版木は明和６年（1769）に作られたもので、絵馬には出馬と入り馬との二種類があって、参拝した際にもらった絵馬が入り馬だと（頭が右にあるもの）ゲンが良いと喜ぶという。ここでもやはりもらった絵馬は牛小屋の入口に吊っておく。[註(3)]

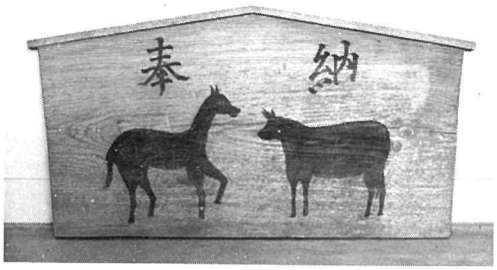
桜井市箸中では７月の土用丑の日に行なわれるノグッタンに牛がマンガをかけている絵や農具の絵を紙に画いて供える。一方橿原市今井の小綱では、牛、鍬、鋤等の絵を白紙に画いた絵馬を供えるそうである。ただし、農具については昔は木で模型を作っていたとのことであり、[注(4)]行事を簡略化するうえでとられた処置とみなすことができ、桜井市箸中の場合もそうした経過を予測しうる。

これら絵馬奉納習俗からは豊作祈願といった意図が顕著に窺えるが、奈良市の数事例についてはこの地域の行事内容に対応して、いわば牛の守り札のごとく用いられているのが一つの特徴といえよう。ところで、絵馬でなくして藁製の牛馬を供える事例が天理市新泉と岩室に存在する。両者の現在のそれは、御田植祭と同様の行事内容をもつもので予祝儀礼とみなしうるが、後者については牛を切断する仕草が伴なうことから、供犠として牛が使われたのではないかと考えられている。[註(5)]当麻町穴虫にある野神山（頂にノガミが祀られていた）の麓に野神という字名の水田があってこの付近から時々土馬が出る[註(6)]との報告もあることと重ね合わせると、すこぶる興味深い見解といえるが、ここではこれ以上立ち入る余裕はない。

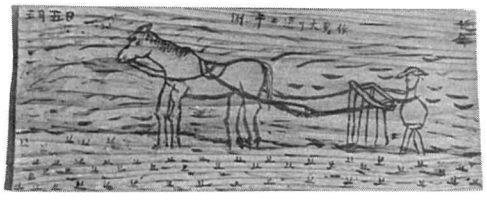
では次に御所市蛇穴の蛇について紹介しよう。頭部分と芯縄だけであるが、稲藁製、頭部径30センチ、長さ97センチ、高さ48センチ、この蛇の作製工程は以下の通りである。

(1)三つ編みにして耳の部分を二つ作る。幅約５センチ、長さ１メートル余り。これを二つ折りにして地獄結びに芯縄を結びつける。

(2)三つ編みの周囲を藁１束（20把）で囲み、



田原本町今里の絵馬（85W×43Hcm）



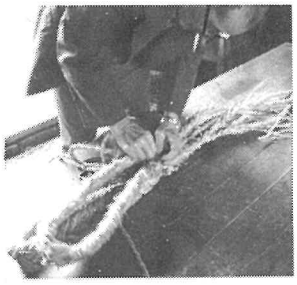
橿原市地黄の絵馬（60W×23Hcm）

耳にする部分だけ上二方に出し、仮締めする。
(3)頭部分を縄で締めて行き、仮締めの縄を取り、顔をつくるべく庖丁で前面を裁断する。これにボール紙を赤く塗った口をつけ、竹筒で目をつける。頭部はこれで完了する。
(4)以上は5月4日に行ない、頭屋の家に飾っておいて翌5日の朝野口神社へ持って行き、ヤグラを組んでハシゴをかけ、これを利用してワッショイ、ワッショイと囃しつつ、3本の芯縄を中心に藁1把ずつをはさみながら青年団員3人で三つ編みにし、最終的に胴の長さを7尋半にする。最後に子供が引っ張れるように胴体各部に縄を結びつける。胴体は完成まで約2時間、藁20束を要する。

ところで蛇穴の場合は稲藁を用いていたが、天理市新泉、川西町下永東城・西城、田原本町今里等では小麦藁を使って蛇を作っており、現在稲藁を用いている橿原市上品寺でも、やはりかつては麦藁を使っていたとのことである。また、田原本町鍵のように部分的に麦藁を用いるという地域も存在する。現在は麦を作らない村が多く、天理市新泉では近在の村から確保し、一方田原本町今里、川西町下永等では麦種を申し送りにして頭屋が麦藁を確保すべく責任をもって栽培するとのことであり、何故にこうも麦に拘泥するのか検討してみる必要があるだろう。

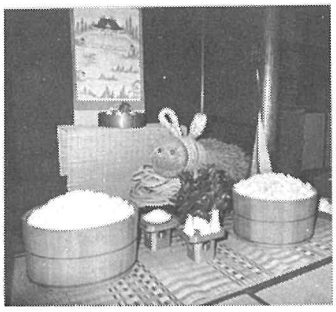
奈良市三条地区のように、祭当日その年の麦刈り、田植の人夫賃や田植始めの日[註(7)]を協定する地域や[註(8)]、ノガミ祭の時季は小麦の収穫と重なるので6月1日から5月1日に行事の日程を変えたという奈良市法蓮佐保田町のような地域もある一方、橿原市上品寺、川西町下永等ではノガミ祭が麦秋に当たっていたといい、天理市平等坊ではノガミの祭をのうむぎさんの日と称し、同市森本でもこの祭をのうむぎさんといっている。さらに同市南柳生のように麦一升とお金を出して仲間入りをし[註(9)]、川西町下永東城のように麦一升ずつ出して祭の経費に当てたという所もあり、奈良盆地中部を中心にノガミの祭には麦の収穫祭的要素が認められる。また、天理市森本ではこの日麦のチマキを作るといい[註(10)]、川西町下永では麻の葉に包んだハッタイコをチマキに入れ、さらに押し飯にも添えて子供達に渡すという。こうした習俗も、そのことを裏付けるものといえよう。

註(1)(3)(8)　『奈良市史民俗編』　昭和46年
(2)　保仙純剛「奈良盆地のノ神」日本民俗学3－3　昭和31年
(4)　『橿原市史』　昭和37年
(5)　佐伯有清『牛と古代人の生活』至文堂　昭和42年
(6)　笹谷良造「野神さんと八王さんと」（『二上村史』所収　昭和31年）
(7)　奈良盆地の田植は6月20日前後が多い。
(9)　『天理市史』昭和33年
(10)　ふつうチマキは米の粉で作る。


(1)

(2)

(3)


(4)のイ

(4)の口

(4)のハ

御所市蛇穴のノガミ製作工程

県民情報コーナー　図書

旧萩原家住宅の紹介

旧萩原家住宅は桜井市下に所在していた。

桜井市は製材・木工業のさかんな街であるが、国鉄桜井線が開通する以前は伊勢・多武峰・吉野参りの交通の要所として発展してきた。当家住宅は桜井から多武峰へ通ずる多武峰街道に沿った小高い丘の上に位置し、昭和41年の民家緊急調査の結果県指定文化財に指定された。その後萩原氏より奈良県が譲り受け、大和民俗公園へ移築したものである。建物の建設年代については、今回の解体調査で確証を得られなかったが、18世紀初期と推定され、次のような事項が判明した。

1) 当初の平面計画は4間取りで、土間・居室部境を閉鎖し、「ざしき」には仏檀「とこ」及び脇床を付け、「なんど」を背面側へ半間突き出したもので、「ざしき」「なんど」の西側に取付いていた2部屋は大正5年の増築であることが判明した。

2) 上屋梁は2間半で背面に1間の下屋を出し、小屋組は「なんど」上部を除き扠首組で「なんど」上部は梁上端から束立ちとし、棟方向は扠首組の棟に対して直角に納められている。建設当初の屋根は草葺の入母屋造で、正側面の三方は葺降しており、背面の下屋及び「なんど」上部については確証を得られなかったが、本瓦葺であると考えられた。そして、建設後屋根は数回の改変を受け、大正5年の改造で入母屋造が切妻造となり、桟瓦葺の落棟が付けられた。

以上のように、旧萩原家住宅は国中の他の農家とは少し異なった外観を有し、特に庇が背面より発達していることが注目される。

今回の復原工事は旧萩原家住宅の外に香芝町狐井に所在していた旧赤土家住宅離座敷も含まれている。この建物は草葺入母屋造、4面本瓦葺の庇付で、平面は8畳1間に「とこ」・違い棚・出書院を付け、3方を縁で囲んだ離座敷である。建設年代については明らかではないが、18世紀初期をくだらないものと考えられる。

当公園に移築完了した建物は、付属屋を含めると今回で5棟になり、公園の整備も着々と進められている。

(今西良男)

萩原家住宅

★★★★ おしらせ ★★★★

●民俗博物館の行事予定

4月2日～9月24日まで
テーマ展　『農　具』
4月23日　体験学習講座〈ザルつくり〉
5月14日　民俗講座（午後2時より）
講師天野元之助氏　テーマ『中国の農具』
講師薮内清氏　テーマ『機械としての農具』
5月21日　体験学習講座〈三宝つくり〉
6月25日　体験学習講座〈チマキつくり〉
7月23日　体験学習講座〈竹櫃つくり〉
7月29～30日　親と子の民俗教室

〈**表紙解説**〉　農具あるいは山道具の模型を神に供える風習は野神、亥の子、山の神まつりに見られるが、シメナワに吊して山の神に供える習俗は東吉野村、川上村に多く、東山中の一部でも認められる。

■編集後記■　民俗学、博物館学専攻の人達のみならず、水稲慣行農法の研究をめざす農学徒、また民俗資料に魅せられたデザイナー、さらには考古学徒、ジャーナリスト等様々な人達が学芸員室を訪れる。忙がしさにかまけてついなおざりにしてしまうこともあるけれど、非力ながら精一杯話相手をさせていただいている。しかし、稀には博物館を喰い物にしようとする研究者が紛れ込むこともあって憤りを感じることさえある。　**(尾瀬河骨)**

奈良県立民俗博物館だより　Vol. V　No.1　1978年5月5日　発行
奈良県立民俗博物館 編集発行　〒639-11 奈良県大和郡山市矢田町545　☎07435③3171㈹　印刷　㈱中西文山堂